

『ミス・ヘレン・ポッター
アメリカで最も偉大な朗読者，なりきり芸人』
ヘレン・ポッターの公演宣伝パンフレット（1885年）

山田 晴通 訳

解題

ここに訳出するのは、19世紀末のアメリカ合衆国におけるライシーム運動の中で、朗読者、ないしは、物真似、なりきり芸の第一人者として絶大な人気を博した女優、ヘレン・ポッター（Helen Potter, 1837-1922）の1885年の公演を宣伝する無署名のパンフレットの内容である。このパンフレットは、アメリカ合衆国議会図書館が所蔵するものの画像が、インターネット上に公開されている（<https://www.loc.gov/resource/rbpe.20703200/>）。

ヘレン・ポッターについて、管見する範囲では、日本語による紹介は見当たらない。訳者（山田）は、ライシーム運動に関する情報収集の過程で彼女の存在を知り、ウィキペディア日本語版に（おもに英語版記事からの翻訳で）記事「ヘレン・ポッター」を作成した。さらに、関連するいくつかの記事も同様に英語版からの翻訳により作成した。ポッターの特異な芸については、ウィキペディアの記事のほか、ネット上にいくつか紹介記事があり、また、1891年に初版が出た彼女自身の著書 *Helen Potter's Impersonations* (Potter, 1891) や、彼女について独立した項目 (pp.170-171) を立てての言及があるジェイムズ・バートン・ポンド (James Burton Pond, 1838-1903) の著書 *Eccentricities of Genius; Memories of Famous Men and Women of the Platform and Stage* (Pond, 1900) が、いずれも復刻版で流通している。

この訳稿では、'impersonation', 'impersonator' に、一貫して「なりきり芸(人)」の訳語をあてているが、通読すれば明らかのように、ポッターの芸はもっぱら笑いを呼ぶことのみを主眼とするという意味でのお笑い芸人の物真似芸ではなく、より演劇的、芸術的なものであった。ここでは差し当たり、そのような独自の芸を磨いた彼女が、19世紀末のアメリカ合衆国における社会教育運動であったライシーム運動やショトーカー運動と関わる形で1870年代から1880年代にかけて活動し、1890年に引退したという歴史上の位置を確認したい。このタイミングは、彼女の芸が、動く映像としても、まともな録音としても、残されなかったことを意味している。辛うじて残されているのは、わず

『ミス・ヘレン・ポッター アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人』

かな写真だけである。そしてそれは、彼女がなりきり芸の対象とした人々の多くについても当てはまることである。その意味で、彼女の芸は複製技術時代の到来に先んじた、早過ぎたものであり、今となっては追体験することが叶わない幻の芸ということになる。しかし、視点を変えれば、全てがメディア化していった20世紀の到来直前にそうした芸能が成立していた基盤を探ることは、メディアの本質を考察する上で有益な示唆を与えるのではないかとも思われる。

さて、このパンフレットは、4ページから成っており、1ページ目がページの3分の2ほどを占めるポッターの立ち姿を線描した表紙絵と、ワシントンD.C.での公演の告知、2ページ目から3ページ目にかけてが、おそらく元々は『ライシーアム・マンズリー』(*Lyceum Monthly*)誌に掲載された記事と思われる紹介文「成功ほど立て続けに起こるものはない」(Nothing Succeeds Like Success)で、3ページ目の下3分の2ほどが公演プログラムの予告、4ページ目が各地の新聞に載った過去の公演の紹介記事の転載から成っており、4ページ目の下にも照会先が記されている。転載されている新聞記事類の日付は1883年秋に集中しており、あるいはこのパンフレットは1884年初頭に、冬のシーズンの途中で作成され、次の冬のシーズンにも流用されたものであるのかもしれない。

以下、翻訳にあたっては、初出の固有名詞には、原文中に見える表記で英字綴りを括弧書きし、それが一般的な表記と異なる場合などには訳注で補った。また、1ページ目の下の告知と、3ページ目の下のプログラムについては、原文のレイアウトに準じた英字での表記を併せて示した。

文中に見える人名や文学作品などの中には、今日では一般的に知られているとは言えないものも多い。また、原テキストには、印刷上ないし保管上の瑕疵から印字が読み取れず単語を補わなければならない箇所や、誤植が疑われる箇所もある。そこで、全面的に訳注を付して読者の便宜を図ることにしたが、アメリカ文学や合衆国史に通じた読者にはややうるさ過ぎるかもしれない。逆に肝心なところへの言及の欠落や、何らかの誤解もあろうかとも危惧する。諸賢のご教示を乞うところである。

【1 ページ】

(表紙絵の左上にある語句)

ヘレン・ポッター

(以下は、描きこまれた書物の表紙に見える語句)

ロングフェロー

ディケンズ

シラー¹⁾

シェイクスピアの劇

ヴィクトル・ユーゴー²⁾

(表紙絵の下にある告知)

ミス・ヘレン・ポッター

アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人

会衆派教会³⁾

ワシントン D.C.

1885年3月3日、火曜日の夕刻

チケット販売の詳細については、日刊紙をご覧ください

Miss HELEN POTTER,

America's Greatest Reader and Impersonator,

Congregational Church,

WASHINGTON, D.C.,

TUESDAY EVENING, MARCH 3, 1885,

For Particulars of Ticket Sale, See Daily Papers.

【2～3 ページ】

成功ほど立て続けに起こるものはない

『ライシーム・マンスリー』誌

この言葉が本当によく当てはまるのが、ライシームで評判のミス・ヘレン・ポッターの芸歴であろう。控えめで地味な気質の彼女は、自分の芸をコツコツと磨き、その偉大な才能と天分によって、朗読者や演説家たちの頂点を占めるに至った。彼女ほど、メイン州からカリフォルニア州に至るまで、アメリカ各地のライシームの主権者たちから確固たる支持を得ている芸術家は他にはいないし、新人を求める声が常々ある中で、現在の彼女ほど高い出演料をとっている者がいないということは、ミス・ポッターが魅力と人気を発揮し続けてい

『ミス・ヘレン・ポッター アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人』

る何よりの証拠だと断言して間違いない。2月13日付の『フィラデルフィア・インクワイアラー』(*Philadelphia Enquirer*)紙⁴⁾は、当地のスター・コース (the Star Course)⁵⁾に12回目の出演を果たしたミス・ポッターについて、以下のように報じている。「今シーズンのスター・コースを開幕する夕べとなった昨夜のアカデミー・オブ・ミュージック (Academy of Music)⁶⁾で、ミス・ヘレン・ポッターは多くの聴衆に歓迎された。ミス・ポッターは、ここではいつも人気者であり、昨夜の歓迎ぶりは彼女の人気がいささかも陰りを見せていないことを示していた。彼女の演目は、ニグロ⁷⁾、ダーウィン主義者、開拓者という三者三様の説教者たちの演説の模倣にはじまり、類まれな声色の使い分けを披露するT・B・リード (T.B. Read)の詩「漂流」(Drifting)⁸⁾の暗唱、田舎の学校における朗読の授業の例示、『ヘンリー八世』からの二つの場面、すなわち王妃キャサリン・オブ・アラゴンの宮廷における懇願と、死を間近にした彼女の語り⁹⁾、驚くほどそっくりなシャーロット・クッシュマン (Charlotte Cushman)¹⁰⁾の描写、この国に良き理念をもたらしたとして彼女が賞賛しているオスカー・ワイルド (Oscar Wilde)¹¹⁾のなりきり、少年たちの訓育について自分の理念を語る北部人の未婚婦人の模倣、T・デ・ウィット・タルマージ (T. De Witt Talmage)風の「新聞 (newspapers)」についての演説であった¹²⁾。拍手は自然に何度も起り、その多くは熱狂的なものであった。冬の巡業 (the Winter Course)の幕開けとして幸先の良い滑り出しであった。

ミス・ポッターは、万人に賞賛されること間違いないの芸を提供する。実際、これまでもそうであったことは、彼女の大きな、継続している人気によって証明されている。ミス・ポッターのユニークな芸をまだ実際に見ていない方々のために、我々としては、ボストンの新聞業界で最も有能とされる女性ジャーナリストのひとりが書いた次のような描写を加えておきたい¹³⁾。

「登場するのは、人物描写に関する奇術師のような存在で、丸ごと一夕の演目を、誰の手を借りることもなく演じてみせ、2時間ほどの間に5着も6着もの衣装をまもって登場し、メイクアップも完璧で何人もの人物たちがいるように思えるほどだが、楽屋を覗いてみれば、そこに出入りする本物のジョン・B・ゴフ (John B. Gough)¹⁴⁾やファニー・ケンプル (Fanny Kemble)¹⁵⁾、ローレンス・バレット (Lawrence Barrett)¹⁶⁾などが見えた人々が、実はたったひとりの女性であることが明らかになる。

昨夜の彼女の演目は成功であり、彼女は好意的ではない批評を一步一步無効にしていった。彼女は昔ながらの型にはまった朗読を捨て、新たに彼女自身にしかできない特異な芸を創り上げた。訛りを表現させれば、彼女は驚くほど上手である。スコットランド人、フランス人、ドイツ人、イタリア人、ニグロと、どれが一番上手いかを決めるのは難しい。彼女の声色の幅の広さ、体つきとはかけ離れた声を操る力は、聴衆の前に立つ他の講演者の誰もが敵わないほどであり、加えて、彼女が仕上げることのできる見事なまでの体つきの模倣は、例えば

キャシアスを演じるローレンス・バレットのような男性を取り上げる一見不可能に見えるような場合にも、どう見ても彼が我々の目の前に立っているように思わせるほどである。短髪がかつらであると疑う者はいまいし、引っ込んだ両目は単なる偶然の相似であるが、口の周りの特徴ある表現は装われたもので、頭や体の運び方は研究された身のこなしであり、豊かな襞のあるギリシア風の掛け布の衣装の下には生身の一人の女性が隠されているというのが事実だが、この役柄に扮したミス・ポッターの写真を見ても、我々はそれをベネット氏の写真だと思い込んでしまいかねないほどなのである¹⁷⁾。

ファニー・ケンプルに扮した彼女は、この有名な朗読者が身につけているのと同じような服装を着て登場する。古風な薄紫色の波紋があしらわれた生地で、簡素な長い曳き裾は帆立貝のように縁どられサテンで束ねられており、絞られたウエストに細い長袖、襟にはレース飾りが施されている。要するに、そこにいるのは、私たちが見聞きしたことがあるミセス・ケンプルであり、『テンベスト』から「難破」の場面を朗読するのだが、耳障りなガラガラ声のキャリバンから、対照的に甘く優しい口調のミランダへと易々と移る様は、ミセス・ケンプル以外の誰からも我々が聞いたことがないものである。

しばし舞台から退いた後、再び目の前に現れた姿に、我々は驚かされる、いや驚愕する。これはジョン・B・ゴフなのか、はたまたミス・ポッターのなりきり芸なのか？ その声も、抑揚も、仕草も、すべて本物の生き写しで、しかも見分けがつかないことに、ゴフが取り上げるよく知られた主題である禁酒について、彼以外の誰もなし得ないような話ぶりで語るのだ。この夜、最も心が込められたアンコールの声に応え、拍手に感謝しながら、この講演者は再び舞台の前面に登場した。そこで、客席の隅から隅までお辞儀をする姿で、ジョン・B・ゴフと見えていた者の謎が解けた。そこにいたコートとベストを身につけた灰色の髪と髭の人物は、腰から下は、簡素な黒いスカートをまとった女性の姿であり、それは演壇から舞台の袖まで巧みに張り巡らされた幕によってなりきり芸が終わるまで隠されていた。こうすることで、ミス・ポッターは、効果を損なうことなく、全面的に男性の衣装を身につける無粋な手間を省いていたのである。しかし、これ以上説明が必要だろうか。この芸が徹頭徹尾、芸術的であったと言うだけで十分である。その振る舞いにおいて、ミス・ポッターは以前と変わらず素朴であり、その趣味嗜好と直感は洗練され繊細である。彼女は聴衆を怒らせるようなことはしないし、成功に甘えて芸が荒れるといったことはまったくない。

公的な存在の女性として彼女は、まったく非の打ち所がないし、私的な人物としての彼女は、誠実で愛らしい。彼女は友人たちにも、敵に対しても寛容で、広い心を持ち、細やかで正直かつ恐れ知らずで、卓越した知性と疑いない実績を備えている。彼女は、全ての女性が褒め称えるべき女性たちの中でも、卓越した存在として立っている。」

『ミス・ヘレン・ポッター アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人』

ミス・ヘレン・ポッターの

大独演芸

プログラム

朗読

英雄的

感傷的

ユーモラス

第一部

サンダルフォン ロングフェロー¹⁸⁾
ゲイブリエル・グラブ ディケンズ¹⁹⁾
漂流 T・B・リード
ジェイキー 作者不詳²⁰⁾

休憩

第二部

音楽 - - - - - 厳選

衣装付き なりきり芸

演劇的暗唱『マクベス』より シェイクスピア²¹⁾
ミス・ヘレン・ポッター

音楽 - - - - - 厳選

メリッサおばさん 変わり者

J・T・トロウブリッジによる、ある北部人のスケッチ²²⁾

典型的なニューイングランドの独身婦人が、少年についての見解を述べる。

ミス・ヘレン・ポッター

音楽 - - - - - 厳選

禁酒 ジョン・B・ゴフ風に

演目の最後は、ミス・ポッターの十八番、ジョン・B・ゴフのなりきり芸で、この有名な演説家の講演の一部を紹介する。

ミス・ヘレン・ポッターの事業や諸活動は、

合衆国ライシーアム事務局

が独占的に管理しています。

ハリー・セントオーモンド, マネージャー²³⁾
B・S・ドリッグス, 仲介代理人

ニューヨーク
ブロードウェイ 757 番地

MISS HELEN POTTER'S
Grand Monologue Entertainment
PROGRAMME.
READINGS.

HEROIC,

SENTIMENTAL,

HUMOROUS.

PART FIRST.

SANDALPHON,	<i>Longfellow</i>
GABRIEL GRUB,	<i>Dickens</i>
DRIFTING,	<i>T. B. Read</i>
JAKY,	<i>Anon</i>

INTERMISSION

PART SECOND.

MUSIC,	-	-	-	-	-	-	SELECTED
COSTUMED IMPERSONATIONS.							
DRAMATIC RECITATION, SCENE FROM "MACBETH,"							
							<i>Shakespeare</i>

Miss Helen Potter.

MUSIC,	-	-	-	-	-	-	SELECTED
AUNT MELISSA	<i>Eccentric</i>

A Yankee Sketch by J. T. Trowbridge.

Wherein a typical New England Spinster explains her views upon Boys.
Miss Helen Potter.

『ミス・ヘレン・ポッター アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人』

MUSIC. SELECTED
TEMPERANCE, a la JOHN B. GOUGH
The entertainment concluding with MISS POTTER'S grand impersonation of John B.
Gough, introducing a portion of one of this celebrated orator's lecture.

Miss Helen Potter's business and engagements are under the exclusive management of
the

UNITED STATES LYCEUM BUREAU.

Harry St. Ormond, Manager. 757 Broadway, New York.
B. S. Driggs, Representative En Route,

【4 ページ】

『ニューヨーク・コマーシャル・アドバタイザー』 (*N.Y. Commercial Advertiser*) 紙²⁴⁾,
11月21日付

およそ舞台に関することであれば何であれ忌まわしいと良心的な拒否感を抱いている人々の多くも、昨夜チックリング・ホール (Chickering Hall)²⁵⁾ でミス・ヘレン・ポッターが披露した芸なら、すぐさま気に入ることだろう。民衆の中の、そうした実直な層の人々にとって幸いなことに、ミス・ポッターのように才能ある女性が、演劇の世界における高い地位を占めるにふさわしい能力をもちながら、もっぱら朗読と人物模写のメドレーに限って自らの精力を注いでいる。ミス・ポッターの描写する人格のうち、どれが一番優れた出来かと言うことは難しい。素晴らしい多芸多才ぶりを発揮する彼女は、悲しみから陽気な様へ、陽気な笑いの波から精巧に作り込まれた最も深刻な悲劇的調子へと、滑らかに移行する。無愛想なゲイブリエル・グラブの、笑いを呼ぶような物語を朗読するとき、ミス・ポッターは、ただ高尚な劇的洞察力を披露するだけでなく、その鍛え抜かれた完璧な声で聴衆を魅了し、ある時は不機嫌な墓掘り人、ある時はディケンズの物語にはおなじみの邪鬼ゴブリンと、声で色彩や姿を描いて見せる。さらに微妙な繊細さを見せるのは、魅力的な詩「漂流」の彼女なりの表現である。この気高い女性の妖精は、澄み切った詩の言葉が夢のような子守唄に溶け込むところへと聴衆を連れ去り、その詩歌の響きは聞き飽きることがない。これは、この晩の最も喜ばしい経験であった。さらに、村の学校の一場面も、ミス・ポッターの手にかかると、滑稽さが沸点に達する。ミス・ポッターは、他の芸術家たちのなりきり芸に取り組んでいることを非難されることがないほど、彼女は模倣の才に驚くほど長けているが、彼女は彼女自身であるのが最高で、彼女が創造できることが明らかになれば、模写は必要ないのである。

したがって、サラ・ベルナール (Sarah Bernhardt) を演じるミス・ポッターはさほど面白くはない、と言ってもよいのかもしれない。これは大胆な試みであるが、ここでは本家となりきる側の間に似ているところは何もない上、前にも述べたように、ミス・ポッターはあまりに深く他人の人格に入り込んでしまっている。同じ理屈からすれば、ミス・ポッターが心から祝福されるのは、ジョン・B・ゴフの物真似であり、ニューイングランドの老婦人メリッサおばさんの実体化であろう。彼女の大きな存在感、鐘のような声、優美な姿は、生まれながらの女優である本当の天才に最初から備わっていたものである。ミス・ポッターの前途には、輝かしい未来がある。

『ザ・ニューヨーク・サン』 (*The New York Sun*) 紙²⁶⁾

ミス・ヘレン・ポッターは、今シーズンのニューヨークにおける最初の挨拶を昨晚チックリング・ホールでした。席はほぼ満席だった。彼女は明瞭な、鐘のようによくとおる美声をもっている。最初に選ばれた演目は、陰鬱な墓守ゲイブリエル・クラブが経験したゴブリンの物語である。ゴブリンが騒ぎ立てる場面で、ミス・ポッターは、彼女の声の旋律と力を全開にしてこれを表現する。この朗読者の模倣の能力は、次の演目であるトマス・ビーチャー (Thomas Beecher) が彼の黒人の「ブラダー」アンダーソン (his black "Brudder" Anderson) について語る姿において披露される²⁷⁾。聴衆は、アニー・ブーリン (Annie Boleyn) を演じるアンナ・ディキンソン (Anna Dickinson) のいつもの調子²⁸⁾、スーザン・B・アンソニー (Susan B. Anthony) の特異な特徴²⁹⁾、「メグ・メリリーズ」 ("Meg Merriles") を演じるシャーロット・クッシュマン³⁰⁾ の悲嘆の泣き声をはっきりと認識し、さらにジョン・B・ゴフの議論では、その発声、抑揚、発音の特徴が、明瞭に分かりやすく伝わった。拍手は多く、はっきりとしていた。

『レディング・デイリー・タイムズ』 (*The Reading (Penn.) Daily Times*) 紙³¹⁾

1883年10月25日

偉大ななりきり芸と朗読で知られるミス・ヘレン・ポッターは、昨晚、これまでにグラント・オペラ・ハウス³²⁾ に集まったどんな講習会よりも数多い聴衆に歓迎された。ミス・ポッターは並外れた声の力をもっており、彼女の声はとても甘美で、また幅広く、その発声は明瞭で分かりやすい。彼女の女王のような優美さと魅力的な立ち振る舞いは最初から聴衆の心をつかんでおり、事前の期待も大きかったが、結果は期待された以上のものになった。ミス・ポッターは、「エンダービーの組み鐘」 (The Brides of Enderby) と題されたジーン・インゲロウ (Jean Ingelow) の悲しげな詩をはじめ³³⁾、チロルの娘がブレゲンツの街を救った顛末を語るアデレード・プロクター (Adelaide Proctor) の詩文や³⁴⁾、ナポリ湾の夢のような午後を描いた詩「漂流」を朗読した。これに続くのは、古風な学校の授業における朗読

『ミス・ヘレン・ポッター アメリカで最も偉大な朗読者、なりきり芸人』

の事例である。この学級で、ミス・ポッターは、あらゆる馬鹿げた振る舞いを模倣し、男の子たちがしばしば見せる愚かさの断片や、女の子たちの愛情を演じて見せ、この演目は大変に受けた。第二部でミス・ポッターは、シェイクスピアの『ヘンリー八世』からの二つの場面を、シャーロット・クッシュマン風に演じた。一つ目は王妃キャサリンのアラゴンの宮廷における命乞いの懇願であり³⁵⁾、二つ目は王妃キャサリンの死の場面であるが、いずれの場面でも、見事な演技力が発揮される。ミス・ポッターは、「メリッサおばさん」として登場すると、生粋の北部人女性になりきり、彼女（メリッサおばさん）の「男の子たち」についての見解を述べる。演目の最後を締めるのは、ジョン・B・ゴフ風の禁酒についての講演であった。ミス・ポッターが演じ分ける人物は、実に多様であるが、彼女はまったく自然にそうした人々になりきって見せる。彼女には、聴衆の自発的な拍手がふさわしい。この晩、彼女がまとっていた衣装もとても素晴らしかった。

『ランカスター・デイリー・インテリジェンサー』(*The Lancaster (Pa.) Daily Intelligencer*) 紙³⁶⁾

1883年11月17日

教員講習会 (teacher's institute) の一環として行われる最後の娯楽の会が、フルトン・オペラ・ハウス (Fulton Opera House)³⁷⁾ で開催され、主役は劇的朗読者、他の俳優や演説家のなりきり芸で知られるミス・ヘレン・ポッターであった。彼女は、長く保ってきた高い名声を完全に維持している。彼女の最初の朗読は、シェイクスピアの『ジョン王』における公爵アーサーとヒューバートの感動的な対話であった³⁸⁾。スリルあふれる詩「ブレゲンツの娘」(Maid of Bregenz) がこれに続いた。さらに、ホワーキーン・ミラー (Joaquin Miller) のユーモラスな詩「ウィリアム・ブラウン」(William Brown)³⁹⁾、G・W・バンギー (G.W. Bungay) の「パットと蛙たち」(Pat and the Frogs)⁴⁰⁾、「グレイのエレジー」(Gray's Elegy)⁴¹⁾ が、古風な田舎の学校の男女共学の学級で朗読され、いずれもとても滑稽で、拍手喝采が沸き起こった。演目の中でも「重たい」部分では、ミス・ポッターが王妃キャサリンを演じるシャーロット・クッシュマンになりきり、まず宮廷の場面、次いで死の床の場面が演じられ、いずれも真に迫っていただけでなく、クッシュマンそのものに迫っていた。「新聞」について論じるタルマーじや、「禁酒」について講じるジョン・B・ゴフは、男性になりきる彼女の能力の驚くべき披露であり、それらの卓越した振る舞いに対し、大きなアンコールの声が上がった。

契約条件や日程については、マネージャーのハリー・セントオーモンドまで

合衆国ライシーム事務局

講演・コンサート全般の代理業，ニューヨーク市ブロードウェイ 757 番地

訳注

- 1) ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) を指すと思われるが、このパンフレットの中では具体的な言及はない。
- 2) フランスの作家ヴィクトル・ユーゴー (Victor Hugo, 1802-1885) は、このパンフレットの中では具体的な言及はないが、Potter (1891, pp 108-111) には、ユーゴの戯曲『エルナニ』*Hernani* のドナ・ソル (Dona Sol) を演じるサラ・ベルナルド (Sarah Bernhardt, 1844-1923) になりきる要点が示されており、写真も掲載されている。
- 3) 当時のワシントン D.C. には複数の会衆派教会が存在していたが、特に説明なく “Congregational Church” として了解されたのは、“First Church” と称され 1867 年に開堂していた、10th and G St NW に位置した教会と思われる。ここはおよそ 2000 人を収容できる施設であった。First Congregational United Church of Christ - history (<http://www.firstuccdc.org/history/>)
- 4) 『フィラデルフィア・インクワイアラー』紙は、1829 年創刊のフィラデルフィアの日刊紙。現在も存続している。
- 5) スター・コースは、1870 年代に各地で盛んになった連続公演プログラム。フィラデルフィアのスター・コースは 1869 年に開始されていた (Cherches, 2017, p. 41)。この『フィラデルフィア・インクワイアラー』紙の「2月13日付」の記事は、1883 年以前のものである可能性も、1884 年、あるいは 1885 年という可能性もあるが、いずれにせよポッターは、スター・コースの最初期からほぼ毎年出演し続けていたことになる。
- 6) アカデミー・オブ・ミュージック (Academy of Music) は、1857 年に開場したフィラデルフィアのコンサート・ホール、オペラハウスで、当初からオペラハウスとして使用されている建物としては合衆国最古とされる。収容人員は 2500 人あまり。
- 7) 「Negro / ニグロ」は差別的とされる用語であるが、歴史的文書の翻訳であることも踏まえ、このように訳している。このリーフレットの中ではもう一か所で用いられている。黒人を意味する他の表現としては 4 ページ目の『ザ・ニューヨーク・サン』紙の記事に見える「black」がある。注 27 も参照のこと。
- 8) トマス・ブキャナン・リード (Thomas Buchanan Read, 1822-1872) は、アメリカ合衆国の詩人、肖像画家。「漂流」は、ナポリ湾 (作中の言及では、ベスピオス湾 Vesuvian Bay) を舞台にした詩。
- 9) シェイクスピアの『ヘンリー八世』第一幕第二場「王宮の会議室 (The council-chamber)」と、第四幕第二場「キンボルトン (Kimbolton)」をそれぞれ指している。
- 10) シャーロット・ソーндラス・クッシュマン (Charlotte Saunders Cushman, 1816-1876) は、アメリカ合衆国の女優。クッシュマンは、ポッターが得意としたなりきりの代表的な対象のひとりであり、Potter (1891) では、『ヘンリー八世』第二幕第四場「ブラックフライヤーズの大広間 (A Hall in Blackfriars)」と第四幕第二場 (Potter, 1891, p. 23 では「scene I / 第一場」とする版をとっている) における王妃キャサリン (pp. 20-27)、後述するウィルター・スコットの『ガイ・マナリング』におけるメグ・メリリーズをクッシュマンとして演じる方法が述べ

られており (pp. 152-157), それぞれ写真も掲載されている。この前後の文は、原文ではやや曖昧にセミコロンでつながれており、ここでは『ヘンリー八世』の朗読とクッシュマンの物真似を別個の演目ととして訳しておいたが、あるいは『ヘンリー八世』第一幕第二場と第四幕第二場をクッシュマン風に演じたということなのかもしれない。

- 11) オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) はアイルランド出身のイギリスの劇作家。1882年に合衆国各地を講演旅行で回り、ロングフェローらと交流した。Potter (1891, pp. 195-197) では、講演“Lecture on Art”が題材とされている。
- 12) トマス・デ・ウィット・タルマーシ (Thomas De Witt Talmage, 1832-1902) はアメリカ合衆国のプロテスタント聖職者、神学者。説教師、雄弁家としても知られ、影響力の大きい宗教家であった。Potter (1891, pp. 95-97) では、彼の講演「新聞 (Newspapers)」が題材とされているが、おそらくここで言及されているものと同じと考えてよかろう。なお、Potter (1891) では彼の名は、Rev. T. Dewitt Talmage と記されている。なおこのあたりで紙面の破損から明瞭ではない箇所は次のように読んでいる。角括弧 ([]) 書きが破損箇所である。... and an address [upon] “newspapers” a la T. De Witt Talmage.
- 13) 1880年代は、新聞記者の分野に女性が進出し始めたばかりの時期であった。多くの女性記者はもっぱら社交欄 (society page) の担当であったが、例外的な先駆的事例も既に存在していた。ここでは、具体的な記者の氏名のみならず、紙名や日付も明記されていないので断定的なことは言えないが、社交欄がしばしば慈善行事の紹介などを行っていたことを踏まえると、社交欄の記事として掲載されたものと考えてよさそうだが、そうだとすると署名記事というのは稀であるようにも思われる。まったくの想像だが、この紹介文を書いているポッターの関係者は、ボストンの某紙の女性記者と取材を通して面識があり、事後的に、匿名で公表された記事の提供を受けていたのではないだろうか。
- 14) ジョン・バーソロミュー・ゴフ (John Bartholomew Gough, 1817-1886) は、イングランド生まれのアメリカ合衆国の禁酒運動家。各地を講演して回り、法制度による酒類の統制ではなく、個人の自覚に基づいた節制=禁酒 (temperance) を訴え、大きな影響力をもった。ゴフは、ポッターのなりきり芸の代表的な題材であり、Potter (1891) は、本文の冒頭で、ゴフの二つのスピーチ “Blunders” と “Temperance” をどのような抑揚や効果で語るかが記号を付したテキストとして紹介しており (pp. 1-11), さらにゴフに扮したポッターの写真も掲載されている (p. 8 と p. 9 の間)。
- 15) ファニー・ケンプルとして知られたフランシス・アン・ケンプル (Frances Anne Kemble, 1809-1893) は、イギリスの女優、作家。1830年代には合衆国南部の大農園主と結婚して女優は引退して南部で暮らしていたが、後に離婚して女優に復帰し、併せていくつもの著作を発表した。その中には南部での生活を踏まえ、奴隷制度を批判する内容のものもあり、影響力をもった。1877年にイギリスに帰国し、晩年はロンドンで過ごした。Potter (1891, pp. 50-58) には、ケンプルが演じるミランダを想定しておこなう『テンペスト』第一幕第一場「海上の船 (On a ship at sea)」(冒頭の難破の場面) の朗読のための記号を付したテキストとともに、ケンプルや『テンペスト』についての解説が記されている。Hornberger (1935, p. 161) が紹介する 1879年当時のポッターの演目には “Fanny Kemble in a scene from *The Tempest*” として言及がある。
- 16) ローレンス・バレット (Lawrence Barrett, 1838-1891) は、アメリカ合衆国の俳優。エドウ

- イン・ブース (Edwin Booth, 1833-1893) との共演でも知られ、ブースがブルータスを演じた『ジュリアス・シーザー』におけるキャシアスは当たり役のひとつであった。Hornberger (1935, p.161) が紹介する 1879 年当時のポッターの演目には“Lawrence Barrett in a scene from *Julius Caesar*”として言及がある。Potter (1891) は、バレットのキャシアスについて記述 (pp.125-128) とともに写真も掲載している (p.124 と p.125 の間) が、ブースについても、エドワード・ブルワー＝リットン (Edward Bulwer-Lytton, 1803-1873) の『リシュリユー』*Richelieu* から第二幕第二場と第三幕第一場におけるリシュリユー (pp.62-68), 『ハムレット』第五幕第一場「墓場 (A Churchyard)」のハムレット (pp.158-164) の演技が言及されている。
- 17) ここで言及されている写真と同じものか否かは分からないが、既にパブリック・ドメインにある Potter (1891) 所収の、キャシアス役のパレットになりきったポッターの写真 (p.124 と p.125 の間) と、同じく、既にパブリック・ドメインにあるとして wikimedia commons にアップロードされている同じような角度から撮影されたバレットの肖像写真 (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Harvard_Theatre_Collection_-_Lawrence_Barrett_TCS_1.1350.jpg) を本稿末尾に掲載しておくので、比較されたい。なお、このあたりの破損箇所は次のように読んでいる。... and we can [readily] believe Miss Potter's photo-[graph] in this character. ...
- 18) ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882) は、アメリカ合衆国の詩人。「サンダルフォン」(Sandalphon) は、1858 年に小詩集『*Birds of Passage*』(1963 年に刊行された『路傍の宿屋の話』*Tales of a Wayside Inn* に丸ごと再録) の一篇として発表された作品。サンダルフォンは、タルムードなどに言及がある天使の名。
- 19) ゲイブリエル・グラブ (Gabriel Grub) は、イギリスの小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) の短編小説集 *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (通称『ピックウィック・ペーパーズ』) の第 10 巻 (1836 年 12 月刊行) 第 29 章「墓掘り男をさらった鬼の話 (The Story of the Goblins Who Stole a Sexton)」に登場する主人公の墓守の名であり、この短編の別名でもある。この話は、ディケンズの代表作のひとつである『クリスマス・キャロル』*A Christmas Carol* (1843 年) の原型として言及されることが多い (村田, 1992, p.104)。Hornberger (1935, p.161) が紹介する 1879 年当時のポッターの演目には“the story of Gabriel Grub, from Dickens' *Christmas Stories*”として言及がある。
- 20) 「Jakey」を辞書にあたると、おもにスコットランドで用いられる宿なしの呑んだくれのこと、など出てくる。あるいはそうした意味での作者不詳の詩があるのかもしれない。しかし、おそらくここで言及されているのは、Potter (1891, pp.140-143) に収められている、ジェイキー (Jakey) と愛称されている本名がジェイコブ (Jacob) である少年と、その母ミセス・W (Mrs. W.) の会話のスキット “Jakey and Old Jacob” のことであろう。
- 21) 『マクベス』第五幕第一場「ダンシネーン (Duncinane)」。Hornberger (1935, p.161) が紹介する 1879 年当時のポッターの演目には、“impersonated Scott-Siddons in the sleep-walking in *Macbeth*”とあり、このマクベス夫人の演技が、イギリスの女優メアリ・フランシス・スコット＝シドンズ (Mary Frances Scott-Siddons, 1844-1896) のなりきり芸としておこなわれたことが記されている。朗読者、女優としてイギリスで一定の成功を収めたスコット＝シドンズは 1868 年に合衆国でまず朗読者としての公演をおこない、次いで女優としても舞台にも上がった。Potter (1891, pp.83-85) では、誰のなりきりかといった指定なしに、この場面の演技が

- 検討されている。また、Potter (1891, pp.98-102) では、『ヴェニスの商人』第一幕第二場「ベルモント (Belmont)」における、ポーシア (Portia) とその侍女ネリッサ (Nerissa) のやり取りを、スコット＝シドズを想定してひとりで演じる方法が検討されている。
- 22) ジョン・タウンゼンド・トロウブリッジ (John Townsend Trowbridge, 1827-1916) は、ニューヨーク出身のアメリカ合衆国の作家。彼が描いた人物スケッチ“Aunt Melissa on Boys”は広く流布していたようで、他の演者もこれを取り上げていた。例えば、ミネソタ州の日報紙『ダルース・イブニング・ヘラルド』(*Duluth Evening Herald*) 紙は、1895年11月26日付の紙面で、メアリ・カルホーン・ディクソン (Mary Calhoun Dixon) という女性が、人物スケッチ (character sketches) の公演でこれを取り上げると報じている。なお、『ダルース・イブニング・ヘラルド』紙は1883年創刊、1910年に改題して『ダルース・ヘラルド』(*Duluth Herald*) 紙となり、1982年まで存続した。
- 23) ここでマネージャーとなっているハリー・セントオーモンド (Harry St. Ormond) は、生没年などは不詳だが、ライシーアム事務局関係以外でも、同時代の新聞にその名が散見される。例えば、『ロサンゼルス・ヘラルド』(*Los Angeles Herald*) 紙 (1873年創刊、1962年合併により *Los Angeles Herald-Express* に改題) の1893年6月11日付には、最初の西部劇映画とされる1903年の映画『大列車強盗』(*The Great Train Robbery*) の原作となった戯曲を書いた劇作家スコット・マーブル (Scott Marble, 1847-1919) の新作劇 *The House with Green Blinds* のプロデューサーとして言及されており、ニューヨークの週刊芸能紙『ニューヨーク・クリッパー』(*New York Clipper*) 紙 (1853-1924) の1913年5月3日付には、経営者が交代した芸能事務所 H. S. Taylor's Exchange に残留することが報じられている。
- 24) 『ニューヨーク・コマーシャル・アドバタイザー』(*New-York Commercial Advertiser*) 紙は、後に辞書編纂者として著名になるノア・ウェブスター (Noah Webster, 1758-1843) が1793年に創刊した『アメリカン・ミネルバ』(*American Minerva*) 紙が、その後、改題を重ねる中で概ね19世紀を通して用いていた紙名。後に、さらなる合併の結果『コマーシャル・アドバタイザー』の題号を持つ新聞は1923年になくなった。
- 25) ここで言及されているニューヨークのチックリング・ホールは、1875年に開場した1450席のホールで、マンハッタン5番街と18丁目の交差点の北西の角にあった。後に1924年に西57丁目に開場した後のフォーマー・チックリング・ホールや、ボストンにあった時期により異なる複数の同名の建物と同じように、ピアノの製造販売などを手がけていたチックリング・アンド・サンズ (Chickering & Sons, 1823-1983) が、店舗の上階部分に設けていたホールであった。諸事情から閉場となり、1893年には他の目的に転用された。The NYC Chapter of the American Guild of Organists による記述を参照。(http://www.nycago.org/Organs/NYC/html/ChickeringHall.html)
- 26) 『ザ・ニューヨーク・サン』(*The New York Sun*) としても知られる『ザ・サン』(*The Sun*) 紙は、1833年から1950年までニューヨークの有力紙の一角を占めていた朝刊紙。後に2002年から2008年には紙名やモットーなどを継承した同名の『ザ・ニューヨーク・サン』紙が刊行されたが、その後こちらはウェブサイトのみの体制に移行している。
- 27) トマス・キニカット・ビーチャー (Thomas Kinnicut Beecher, 1824-1900) は、アメリカ合衆国のプロテスタント聖職者、教育者。『アンクル・トムの小屋』*Uncle Tom's Cabin* (1852年) で知られるハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ (Harriet Elizabeth Beecher Stowe,

- 1811-1896)の異母弟であり、マーク・トウェイン(Mark Twain)ことサミュエル・ラングホーン・クレメンズ(Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910)の親友であった。“Brudder”はここでは“brother”の黒人訛りの音写で、この表記は黒人霊歌の歌詞などにもしばしば見受けられる。
- 28) アンナ・エリザベス・ディキンソン(Anna Elizabeth Dickinson, 1842-1932)は、アメリカ合衆国の講演者、作家で、奴隷廃止や女性の権利拡張を訴えて広く知られた。後には戯曲も書き、女優としても活動したが、評価は得られなかった。ここで言及されているアニー・ブーリン(Annie Boleyn)は、彼女が最初に公表した戯曲*The Crown of Thorns*(1876年)の主人公アン・ブーリン(Anne Boleyn)を、ディキンソンが自ら演じたさまを指している。James *et al.*(1971, p.476)によると、この演技は、彼女の地元ボストンはともかく、ニューヨークでは笑い者扱いされたという。Potter(1891, pp.190-191)には、ディキンソンの講演“For Your Own Sakes”の記号を付したテキストと解説が記されている。
- 29) スーザン・ブローネル・アンソニー(Susan Brownell Anthony, 1820-1906)は、アメリカ合衆国の女性社会運動家。特に、奴隷廃止、女性参政権、禁酒などの運動において大きな役割を果たした。Potter(1891)では、ジョン・B・ゴフに次いで二番目にアンソニーの項目が設けられており(pp.12-16)、講演“On Trial for Voting”が題材として取り上げられている。
- 30) ここでMeg Merrilesと記されているのは、ウォルター・スコット(Walter Scott, 1771-1832)の小説『ガイ・マナリング』*Guy Mannering*(初版は1815年に匿名で出版)に登場する粗野なジブシー女、メグ・メリリーズ(Meg Merrilies)である。この小説は、スコットの友人であった劇作家ダニエル・テリー(Daniel Terry, 1780?-1829)が戯曲化し、1816年にロンドンで初演された。Potter(1891, pp.152-157)では、クッシュマンが演じるメグ・メリリーズになりきる方法が述べられている。
- 31) 『レディング・デイリー・タイムズ』(*The Reading Daily Times*)紙は、ペンシルベニア州レディングで1858年に創刊され、1870年に合併によって『レディング・デイリー・タイムズ・アンド・ディスパッチ』(*The Reading Daily Times and Dispatch*)紙となり、合併により1897年に『レディング・タイムズ』(*The Reading Times*)紙となった。その後、さらに合併や改題が重ねられて、2002年に現在の『レディング・イーグル』(*Reading Eagle*)紙に系譜がつながっている。A brief history of Reading Eagle Company (<http://www2.readingeagle.com/article.aspx?id=125580>)
- 32) レディングのグランド・オペラ・ハウス劇場(The Grand Opera House Theatre)は、1871年に開場した市場(West Reading Market House)の上に増築する形で1873年に開場した、1000席ほどの劇場。1921年には市場の閉鎖に伴って改装され、名称もCapitol Theatreとなったが、1975年に解体された。GoReadingBerks/The Grand Opera House Theatre, Reading, PA (<http://www.goreadingberks.com/articles/article.php?articleID=134>)
- 33) ジーン・インゲロウ(1820-1897)は、イギリスの詩人、小説家。「エンダービーの組み鐘」とここで呼ばれているのは、1863年に発表された詩“The High Tide on the Coast of Lincolnshire, 1571”のことである。直訳すると「エンダービーの花嫁たち」となるThe Brides of Enderbyは、イングランド東部リンカンシャー州の小村メイビス・エンダービー(Mavis Enderby)にある組み鐘で、災害などの危険を広く周辺へ知らせる手段となっていた。
- 34) ここでは姓がProctorと表記されているアデレード・アン・プロクター(Adelaide Anne

- Procter, 1825-1864) は、イギリスの詩人。「ブレゲンツの娘」“Maid of Bregenz”とされている詩は“A Legend of Bregenz”として英語圏では広く知られ、ロングフェローが編んだ詩撰集 *Poems of Places* (1876-1879) にも収録された (<https://www.bartleby.com/270/7/115.html>)。しかし、20世紀初めに現地オーストリア西部のブレゲンツを訪れた Holland (1909, pp. 325-326) によると、少女が町を救ったという、この詩が語るような物語は、現地ではまったく知られていなかったという。
- 35) この部分の原文は The first was a representation of Queen Catharine pleading for her life at the Court of Arragon, ... となっており、このようにしか訳せないのだが、『ヘンリー八世』には、王妃キャサリンの命乞いの場面も、アラゴン (通常の綴りでは Aragon) の宮廷の場面もない。記者が何らかの誤解をしているのではないか。
- 36) 『ランカスター・デイリー・インテリジェンサー』(*The Lancaster Daily Intelligencer*) 紙は、1799年にペンシルベニア州ランカスターで *Lancaster Intelligencer and Weekly Advertiser* として創刊された。その後、改題や合併などを繰り返し、現在の『インテリジェンサー・ジャーナル』(*Intelligencer Journal*) 紙に系譜がつながっている。
- 37) フルトン・オペラ・ハウス (Fulton Opera House) は、1852年に建造された、ペンシルベニア州ランカスターの劇場。現在まで継続して稼働しているアメリカ合衆国の劇場としては最古のものとして、文化財指定も受けている。現状の席数は676席である。
- 38) 『ジョン王』第四幕第一場「城内の一室 (A room in a castle)」。
- 39) ホワーキン・ミラーという筆名で知られたシンシネイタス・ハイネ・ミラー (Cincinnatus Heine Miller, 1837-1913) は、アメリカ合衆国の詩人。ここで「ウィリアム・ブラウン」として言及されている詩は、“William Brown of Oregon” のことと思われる。
- 40) ジョージ・ワシントン・バンギー (George Washington Bungay, 1818-1892) は、イングランド出身のアメリカ合衆国の詩人。奴隷廃止や禁酒を訴える活動家でもあった。ここで「パットと蛙たち」として言及されている詩は、“Patrick O'Rourke and the Frogs” のことと思われる。
- 41) ここで「グレイのエレジー」として言及されている詩は、イギリスの詩人トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) が1751年に発表した“Elegy Written in a Country Churchyard” のことと思われる。

文 献

- 村田信行 (1992) : ディケンズの初期「短編小説」(2), 清泉女学院短期大学研究紀要, 10, pp. 103-111.
- Cherches, Peter (2017) : *Star Course: Nineteenth-Century Lecture Tours and the Consolidation of Modern Celebrity*, Springer, 103ps.
- Holland, Clive (1909) : *Tyrol and its People*, Mathuen, 336ps
- Hornberger, Theodore (1935) : Gilded Years of Lecturing: The History of the Student Lecture Association from 1864 to 1884, *The Quarterly Review of the Michigan Alumnus*, 42, pp. 154-167.
- James, Edward T. et al. (eds.) (1971) : *Notable American Women, 1607-1950: A Biographical Dictionary, volume I A-F*, Belknap Press of Harvard University Press, 687ps.

Pond, James Burton (1900) : *Eccentricities of Genius; Memories of Famous Men and Women of the Platform and Stage*, G.W. Dillingham, 564ps.

Potter, Helen (1891) : *Helen Potter's Impersonations*, Edgar S. Warner (New York), 239ps. (復刻版 : 2018, ForgottonBooks/FB&c Ltd.)

This article includes a Japanese translation of the 1885 leaflet “*Miss Helen Potter, America's greatest reader and impersonator, Congregational church, Washington, D.C., Tuesday evening, March 3, 1885.*” The translator believes that this material is in the public domain because it was presumably published in 1885. However, if you are concerned that this translation infringes on your rights under copyright law, please contact the translator at yamada@tku.ac.jp.



写真1 ローレンス・バレットの肖像写真

Harvard University, Houghton Library, W606493_1



写真2 キャシアス役のバレットに扮したヘレン・ポッター